

# 古市遺跡

1986年3月

安来市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、昭和60年11月18日から昭和61年1月30日まで、安来市教育委員会が国庫補助及び県費補助を得て実施した古市遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査にあたり勝部 昭氏（安来市文化財保護委員）の指導を得た。
3. 本書の編集、執筆は、永見英が行なった。
4. 本書で使用した方位は磁北である。
5. 発掘調査で出土した遺物は安来市教育委員会で保管している。

### 古市遺跡発掘調査関係者一覧

調査主体	安来市教育委員会				
地元協力	井塚 学	井塚幾夫	大久佐敦子	古曳 薫	古曳智子
	古曳満代	細田梶子	門垣トミ子	米原綾子	吉田里子
協 力	井塚麻次郎　井塚福吉　細田 晃				
事務局	安来市教育委員会社会教育課				
	課長 青戸邦晃				
	係長 小西敏則				
調査員	永見 英（安来市教育委員会社会教育課）				（アイウエオ順）
	二岡敦彦（安来市教育委員会文化財専門嘱託）				（敬称略）

## 目 次

### 例 言

I 章	はじめに .....	1
II 章	調査概要 .....	2
III 章	検出した遺構 .....	5
	1. 溝状遺構について .....	5
	2. 柱穴群について .....	5
	3. 方形遺構について .....	5
	4. 檜円形遺構について .....	6
IV 章	出土遺物について .....	8
	1. 瓦について .....	8
	a. 瓦の種類 .....	8
	b. 叩きの分類 .....	8
	c. 軒瓦 .....	8
	2. 弥生土器について .....	9
	3. 須恵器について .....	9
	4. 陶器について .....	9
V 章	小結 .....	14

### 挿図目次

第1図	遺跡位置図 .....	1
第2図	第4調査区土層断面図 .....	2
第3図	地形測量図・第3調査区土層断面図 .....	3
第4図	第1調査区平面図 .....	4
第5図	第2調査区平面図 .....	5
第6図	方形遺構 .....	6
第7図	楕円形遺構 .....	7
第8図	出土平瓦実測図 .....	8
第9図	出土平瓦実測図 .....	9
第10図	出土軒瓦実測図 .....	10
第11図	出土七七器実測図 .....	11

### 図版目次

図版1	古市遺跡遠・近景 .....	1
図版2	第1調査区 .....	2
図版3	方形遺構・第3調査区 .....	3
図版4	第2・4調査区 .....	4
図版5	出土瓦 .....	5
図版6	出土土器 .....	6

## I 章 は じ め に

古市遺跡の周辺は、水野祐氏によって、山国郷新造院が所在するとされ、また、市道の新設時に伯太町安田の田中弘之氏により布目瓦が表採された地域である。<sup>(註1)</sup>

昭和59年に分布調査を実施し、島根県安来市大塚町字古市1440-1445番地の低丘陵の東側を削った農業用道路の断面と、同丘陵の中央部の作業道の断面に、幅60cm・深さ25cmの落ち込みが180cmの間隔で所在することを確認した。（発掘調査の後に現代以前の所産と考えられる溝状遺構であることが分かった）このため、畑として耕作が進んでいるこの丘陵の遺跡の性格を、早急に確認する必要が生じた。そのため、国庫補助を得て調査を実施することとなった。

昭和60年11月18日から発掘調査を開始した。当初2ヶ所を調査する予定であったが、瓦が多数表採できる所が明確になったことなどから、4ヶ所の調査区を設定して実施した。調査は雪が降ったことなどから長引いたが、昭和61年1年30日に終了した。

註1. 水野 祐「天平以前の出雲の寺院一特に新造院について」『出雲國風土記論叢』所載

1983年



第1図 遺跡位置図 (●)

## II 章 調査概要

古市遺跡周辺は、すべて畑として利用されている。畑となっている部分には花崗岩の風化上の地山がみえている部分もあり、表土は、耕作によりかなり攪乱が、進んでいるものと考えられた。そのため、グリッドを設定することはしなかった。調査区は、市道に最も近い北側に位置するものを第1調査区、南側に位置するものを第2調査区、瓦片が出土するために発掘調査を実施した部分を第3調査区、第2調査区の西側に設定した $1 \times 2\text{ m}$ の部分を第4調査区、の4ヶ所を設定した。

### 第1調査区

第1調査区は、畑に伴うと考えられる溝状遺構、柱穴と考えられるもの、方形で一边が約 $2.7\text{ m}$ の遺構、この遺構を切っている楕円形の遺構が検出された。

### 第2調査区

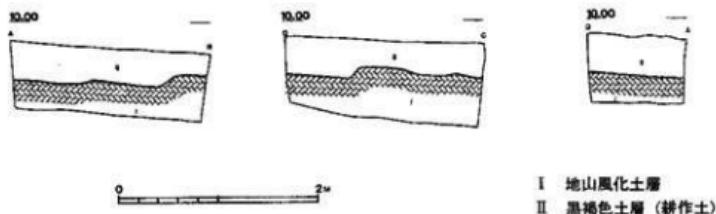
第2調査区は、第1調査区と同様な畑に伴うと考えられる溝状遺構、柱穴と考えられるものが検出された。

### 第3調査区

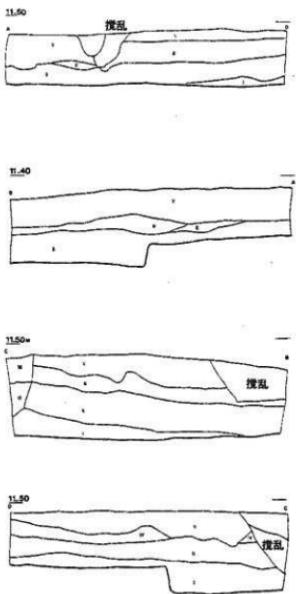
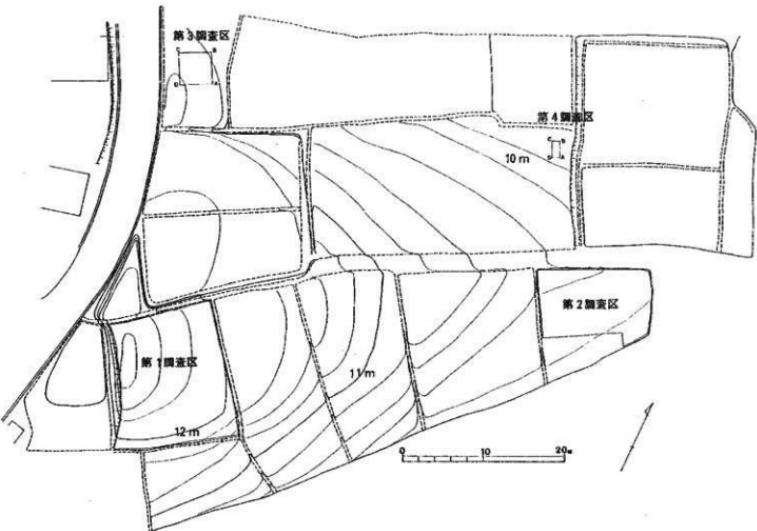
第3調査区は、 $4 \times 4\text{ m}$ の調査区で、地山まで発掘しなかったが、2次堆積の土層から瓦片が多量に検出された。土層は、下層から淡黒色粘質土層、黒褐色粘質土層、淡黒褐色粘質土層、黒色粘質土層、の4層に分かれる。瓦片はいずれの土層からも出土し、下方からは弥生土器片も出土する。しかし、この調査区において遺構は検出できなかった。

### 第4調査区

第4調査区は、ボーリング棒による調査で、非常に堅牢な上層面が確認できたため発掘した。その結果、堅牢な面は地山であり、遺物は検出できなかった。

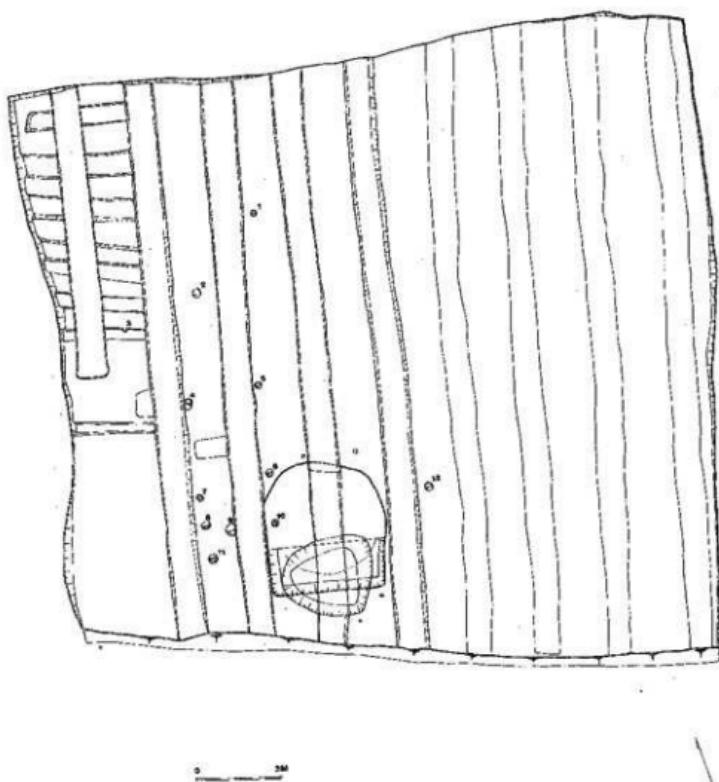


第2図 第4調査区土層断面図

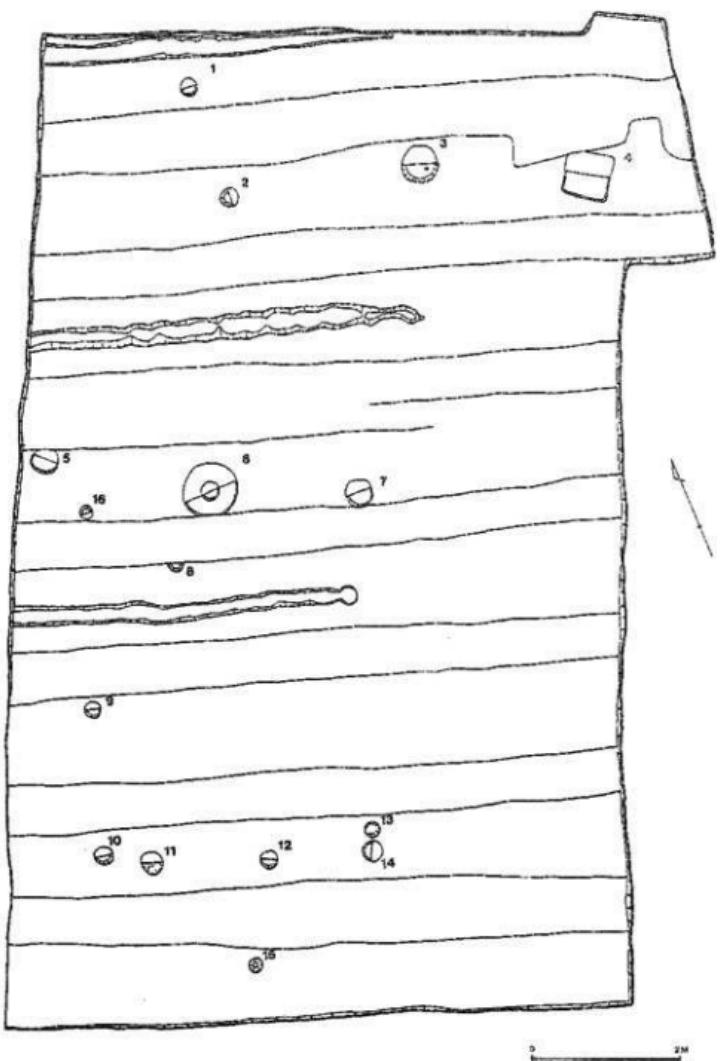


- I 黒色粘質土層
- II 淡黒色粘質土層
- III 黒褐色粘質土層
- IV 淡黒褐色粘質土層
- V 耕作土

第3図 地形測量図、第3調査区土層断面図



第4図 第1 調査区



第5図 第2調査区

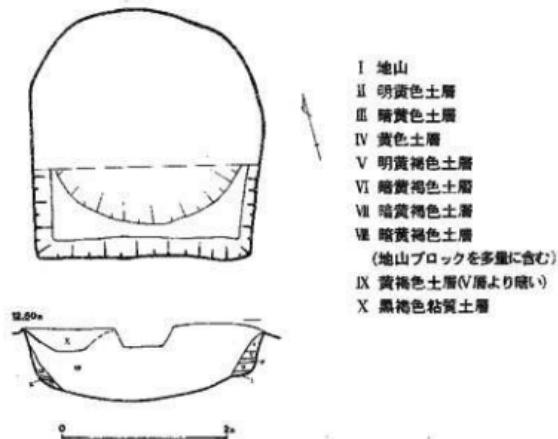
### Ⅲ 章 検出した遺構

#### 1. 溝状遺構について

第1、2調査区において、溝と考えられるものを検出した。第1調査区で明確なものは9本で、方位はN $17^{\circ}$ Eである。第2調査区では10本で、方位は第1調査区のものにはほぼ直行するE $20^{\circ}$ Sである。性格について、土地の所有者などに話を聞いたが、その範囲では知る人は無い。また、時期についても、明確な出土遺物が無かったが、下記の柱穴を切っており、それよりも新しいものであることは断定できる。この遺構を完掘したものだけから言うと、土層は軟柔な暗褐色の1層であり、2次堆積の土層は認められなかった。江戸時代には、井塚茂氏の資料により、建物が所在したことが分かっているが、この遺構がそのようなものと関係があるものとは考えられない。これらのことから、この遺構は烟に伴うもので、現代の所産ではないが、そう時代の上るものではないと考えられる。

#### 2. 柱穴群について

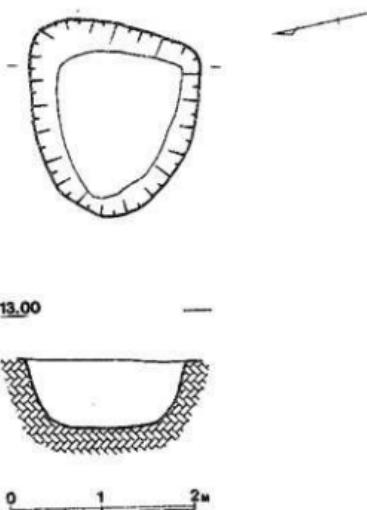
第1・2調査区において、28の柱穴と考えられるものを検出した。第1調査区では12、第2調査区では16である。いずれも、建物になるという配置は、確認することはできなかつたが、いずれの柱穴も堅緻な赤褐色粘質土層で地山の黄褐色に対して分かりやすいものであった。各柱穴の直徑、深さは、表1、2のとおりである。これらの柱穴群から遺物は検出できなかった。そして、この柱穴は、上記のとおり溝状遺構に切られ、第1調査区では下記の方形遺構を切っている。2カ所の調査区からは須恵器片が出土しており、断定はできないが、奈良時代の所産と考えられる。



第6図 方形遺構

### 3. 方形遺構について

第1調査区で検出された方形遺構は、全掘していないため、全容は明確になっていないが、1辺約2.7mの方形で深さ（中央部において）約0.9mの規模と考えられる。壁面はほぼ垂直であり、底部は、平坦ではなくゆるやかな弧状を呈している。この遺構の周りには部分的ではあるが、柱穴として上記したものに比べ小さな、直徑約8cmの穴が検出されている。方形遺構の上層は、断面の中央部分



第7図 楞円形遺構

が暗褐色砂質土層でその両端には、明るい地山の花崗岩の風化土を斑駁状にした土層が確認された。このことから遺構が擾乱を受けている可能性があり、底部が弧状を呈しているのも2次的なものである可能性もあるこの遺構のいずれの土層からも遺物を検出することはできなかった。この遺構は、柱穴・棱円形遺構に切られている。性格等については明確でない。

### 4. 棱円形遺構について

第1調査区で検出された棱円形遺構は、長辺約2.2m、短辺約1.8m（それぞれの中央部）の棱円形で深さ約0.5m（中央部）の規模である。壁面は傾斜している。土層は、黒色粘質土層である。上層の中からは、風化の著しい瓦片が出上する。これは、この土層が第3調査区周辺の七で、瓦片を元来含んでいたものを、穴に埋めたためと考えられる。この遺構からは陶器片が出土している。この遺構は、方形遺構を切っている。性格については明確でない。

第1調査区の柱穴

No.	断面直径 cm	深さ(中央) cm	土 層	形
1	1.4	9.2	赤褐色粘質上層	円 形
2	1.9	16.6	"	"
3	1.2	18.1	"	"
4	2.1	21.5	"	"
5	1.5	10.2	"	"
6	1.6	6.4	"	"
7	1.4	11.1	"	"
8	2.2	7.0	"	"
9	2.9	4.6	"	"
10	1.2	18.1	"	"
11	2.1	18.8	"	"
12	1.9	—	"	"

第2調査区の柱穴

No.	断面直径 cm	深さ(中央) cm	土 層	形
1	2.3	12.9	赤褐色粘質上層	円 形
2	2.4	28.5	"	"
3	4.8	6.6	"	"
4	6.4	3.2	"	"
5	3.8	6.4	"	"
6	7.9 (大) 2.5 (小)	7.8	"	"
7	4.9	9.8	"	"
8	2.1	22.4	"	"
9	1.8	2.1	"	"
10	2.6	22.4	"	"
11	2.9	19.8	"	"
12	2.4	11.2	"	"
13	2.0	21.3	"	"
14	2.5	16.6	"	"
15	2.0	17.7	"	"
16	1.8	3.3	"	"

## IV 章 出土遺物について

古市遺跡からは、瓦片、須恵器片、弥生土器片が出土している。その多くは、第3調査区から出土したものである。

### 1. 瓦について

#### a. 瓦の種類

古市遺跡から検出された瓦は、丸瓦（玉縁式）、平瓦、軒丸瓦（3種類）、軒平瓦（1種類）があると考えられる。

#### b. 叩きの分類（凡例 凸面の状況+凹面の状況）

1類. 繩目+布目（第8図1・2）

2類. 繩目+条痕状文

3類. 繩目+無文（凹面を調整しているものと考えられるが、この調整は一部の可能がある）（第8図3）

4類. 無文+布目（凸面を調整しているものと考えられる）（第8図4・5）

5類. 無文+条痕状文（凸面を調整しているものと考えられる）（第9図1）

6類. 無文+無文（凸・凹面を調整しているものと考えられる）（第9図2・3）

7類. 平行叩き目+布目（第9図4）

8類. 平行叩き目+無文

9類. 条痕状文+布目（第9図5）

10類. 条痕状文+無文（第9図6）

#### c. 軒 瓦

古市I型式軒丸瓦　單弁7葉蓮華文軒丸瓦（推定）。出土したものは直径15cmになるとされる。中房には蓮子を置くものと考えられる。弁の子葉は高く隆起し、これらは、外区の輪郭を縁取る突線である圓線には接しない。撥形の間弁も周縁には接しない。色調は暗青灰色を呈している。焼成は堅緻で、胎土も細かい。第10図1は復元図であるが、今回出土したものは1片で外区から中房の極一部が明確になっている、全体の約8分の1の軒丸瓦片である。

古市II型式軒丸瓦　複弁7葉蓮華文軒丸瓦（推定）。出土した瓦は、直径14.5cmになるとされる。中房には、1+8の蓮子を置くと考えられる。内区と外区を分ける圓線はない。外区内縁には珠文を置く。外区には、鋸歯文を配している。色調は緑灰色を呈し

ている。焼成は軟柔で、胎土は砂を含む。第10図2は復元図であるが、出土した瓦片は、1片で外区から中房の中央部までが明確になっている、全体の約6分の1の軒丸瓦片である。

古市Ⅲ型式軒丸瓦　複弁8葉蓮華文軒丸瓦（推定）。出土したものは直径17cmになると考えられる。中房は、十字に4区画され、各区画に1個の蓮子を置くものと考えられる。弁の子葉は形式化している。内区、外区を分ける圓線はない。外区には、鋸齒文を配している。瓦当裏面には、布目圧痕が残る。色調は表面が黒色、破損面が灰色を呈している。焼成は軟柔で、胎土は砂を含む。第10図3は復元図であるが、今回出土した瓦片は、2片で、外区から中房の一部までが明確になっているものの、中房の中央部が分からず、全体の約2分の1の軒丸瓦片である。

古市I型式軒平瓦（第10図4）瓦当左端に藤手3葉が置かれている。瓦当がどのような文様帶となるかは今後検討したい。周縁は、細い圓線で終わっている。藤手はこの圓線に接している。頭の形態は段頭である。平瓦部凹面に布目圧痕と横骨を残す。色調は灰色を呈する。焼成は軟柔で胎土は細砂を含む。瓦当の厚さ4.5cm。

## 2. 弥生土器について

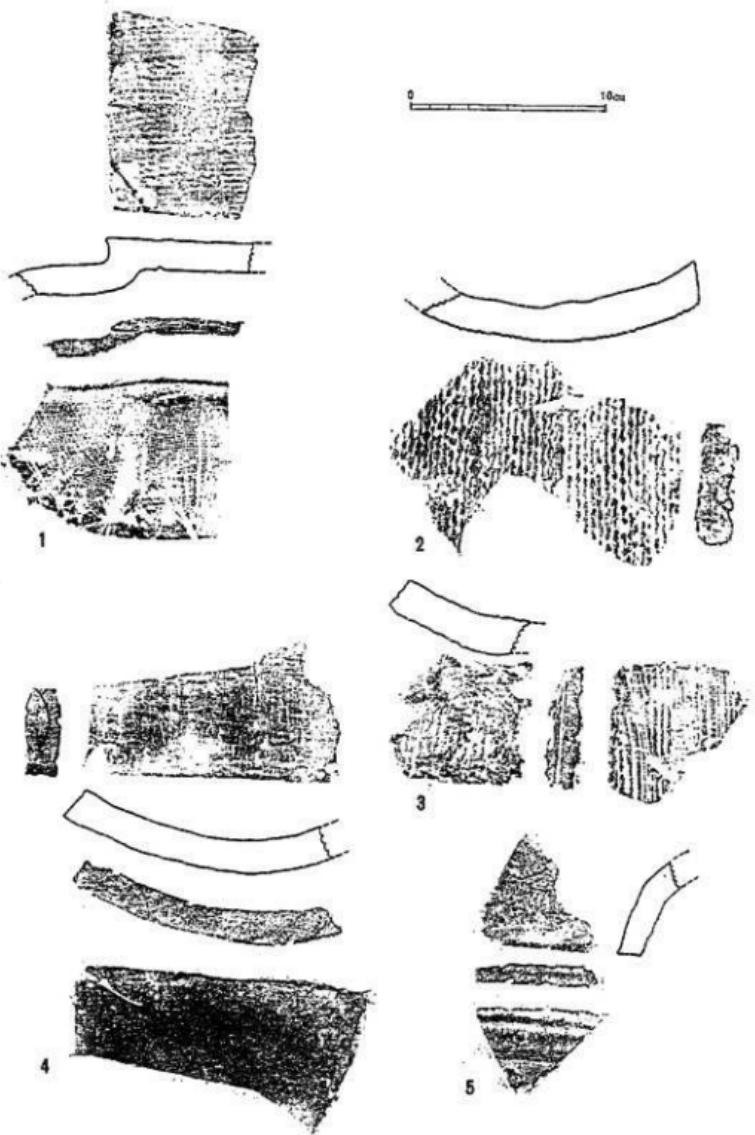
第3調査区で瓦片に伴い鉢形土器、壺形土器（第11図2・3）、底部（第11図4）、口縁部が出でている。鉢形土器（第11図1）の外側表面には赤色顔料が施されている。口縁部（第11図5）には籠描き沈線が施されており、弥生時代前期の土器と考えられる。

## 3. 須恵器について

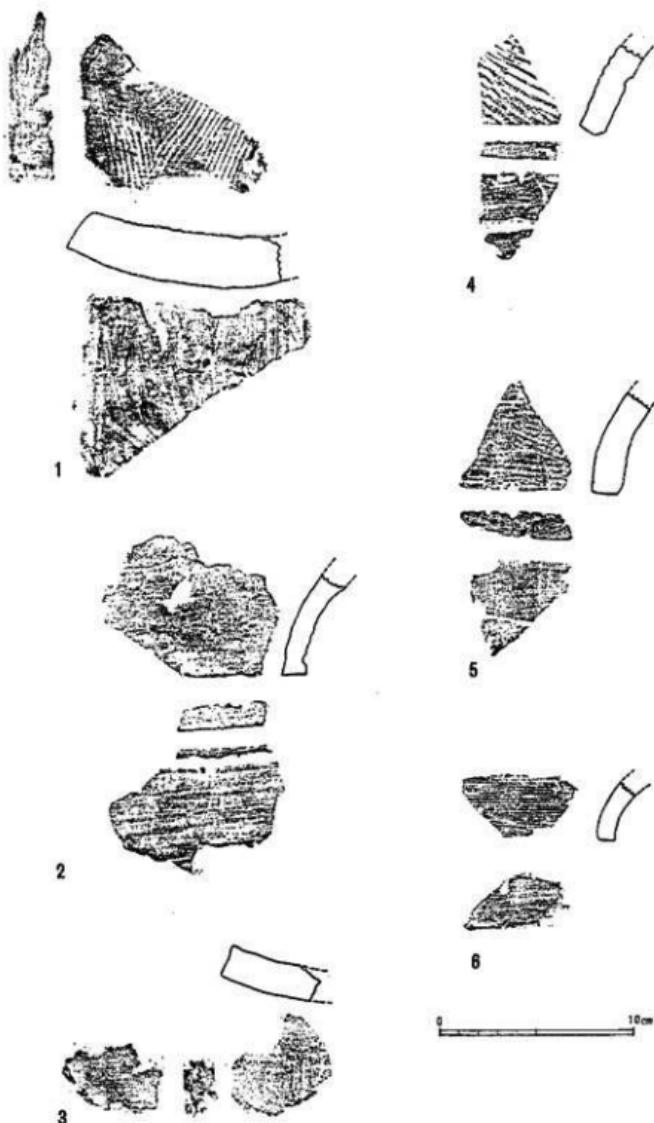
第3調査区で瓦片に伴い蓋、高台付坏、器形不明の土器片が出土している。蓋（第11図6）は、口縁端部は単純に屈曲するもので、摘みの付く直径15cmのものであったと考えられる。高台付坏（第10図7）は、高台径は8.5cmである。器形不明の土器片（第10図8）は、胴部に凸帯のつくもので、内部のその位置には、凸帯を施すためのものと考えられる沈線が付されている。

## 3. 陶器について

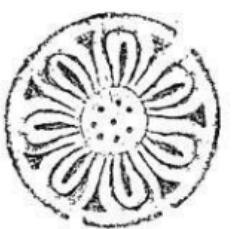
第1調査区の楕円形遺構から陶器片が出土している。小型碗（第11図9）は、口縁径は5cmで黒褐色を呈する、やや光沢のある陶器である。



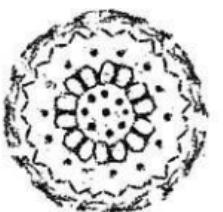
第8図 出土遺物



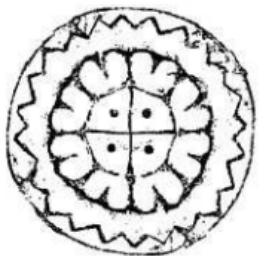
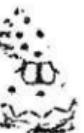
出土第9図



1 古市Ⅰ型式軒丸瓦（復元図）



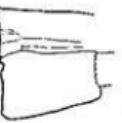
2 古市Ⅱ型式軒丸瓦（復元図）



3 古市Ⅲ型式軒丸瓦（復元図）



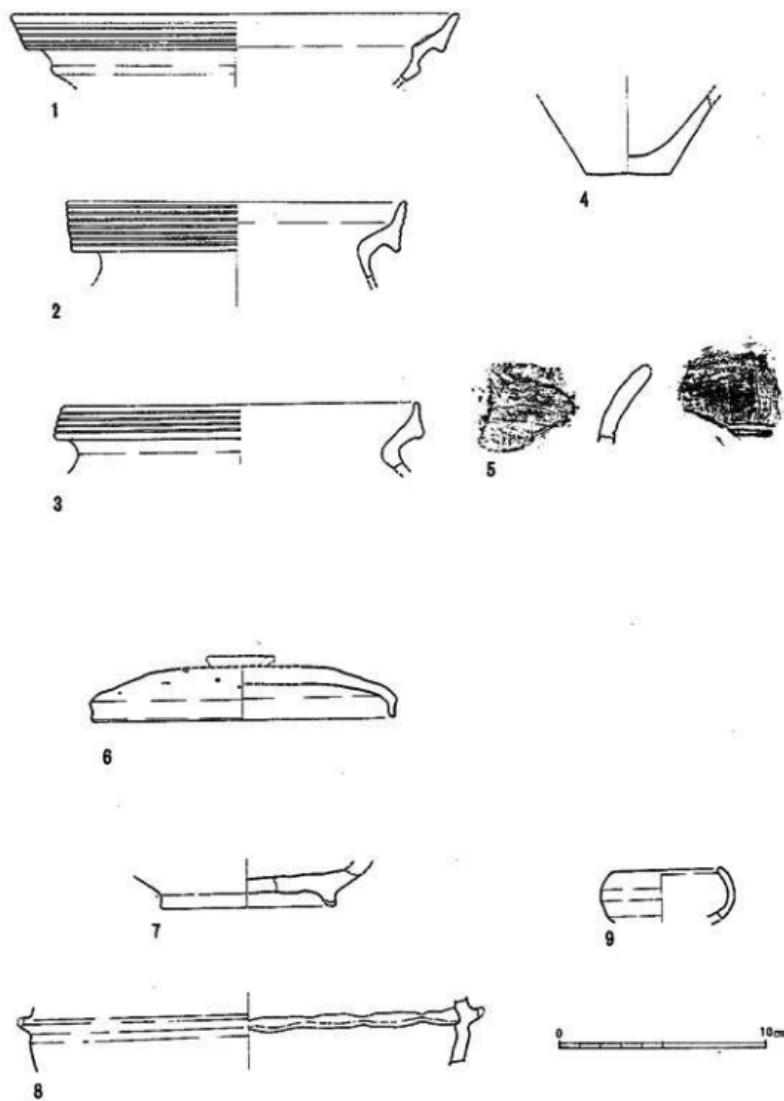
4 古市Ⅰ型式軒平瓦



(凹面)



#### 出土第10図



第11図 須恵器、弥生土器

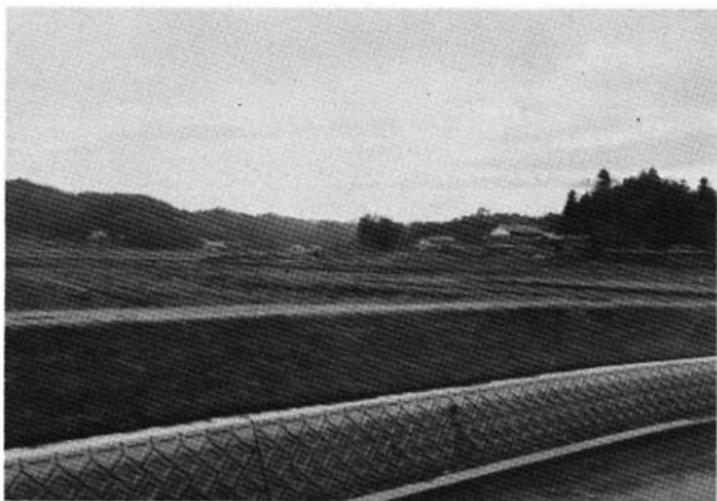
## V 章 小 結

古市遺跡の発掘調査を実施したが、遺跡の性格を明確にすることはできなかった。しかし、注目すべき遺物として瓦片が出土した。この瓦片は遺構に伴うものではなかったが、軒丸瓦で3型式、軒平瓦で1型式が明確になった。奈良国立文化財研究所上原真人氏の所見によると、古市Ⅰ型式軒丸瓦は、教吳寺跡の推定所在地から出土する瓦と類似し、時期は8世紀前半とし、古市Ⅱ、Ⅲ型式軒丸瓦については、8世紀後半とする。このことから瓦には少なくとも2つの時期の瓦があることが考えられ、第3調査区から、流れ込んだ状態で出土した瓦片は窯跡の出土状態とは考えられない。このことから、奈良時代には、周辺に建物が所在していたものと考えられる。

古市遺跡の周辺は、前述したとおり、水野祐氏により山国郷新造院が所在する地域とされている。<sup>(註1)</sup>近藤正氏はこの説やその他の説について「その擬定地に寺跡の存在した形跡は認められない」として、上古田町別所の釈迦堂に所在する説を取っている。<sup>(註2)</sup>この説がほぼ通説となっている状況のなかで、今回の発掘調査により、山国郷新造院であるかどうかは別として奈良時代に瓦を使用した建物が所在したことが、分かったことは貴重な成果と考えられる。

註1. 水野 祐「天平以前の出雲の寺院一特に新造院について」『出雲國風土記論叢』所載  
1983年

註2. 近藤 正、「『出雲國風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』2 1967年



古市遺跡遠景

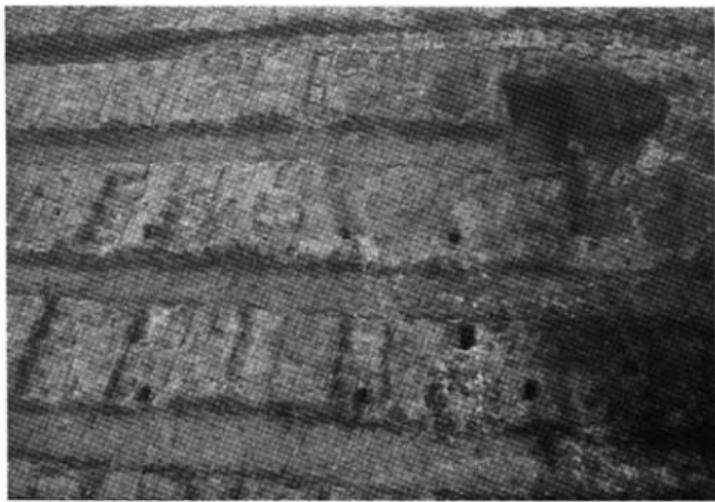


古市遺跡近景

図版 2



第 1 調 査 区

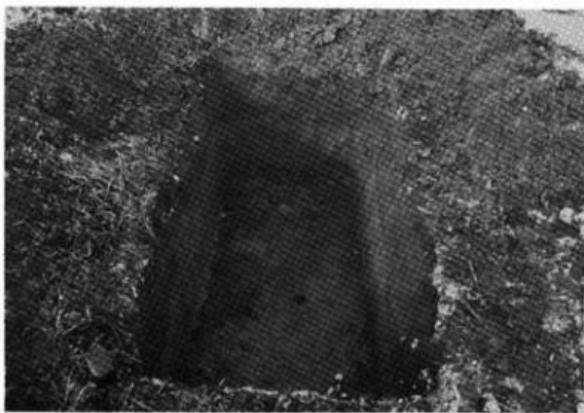


第 1 調査区発掘前の精円形造構と方形造構

図版 3

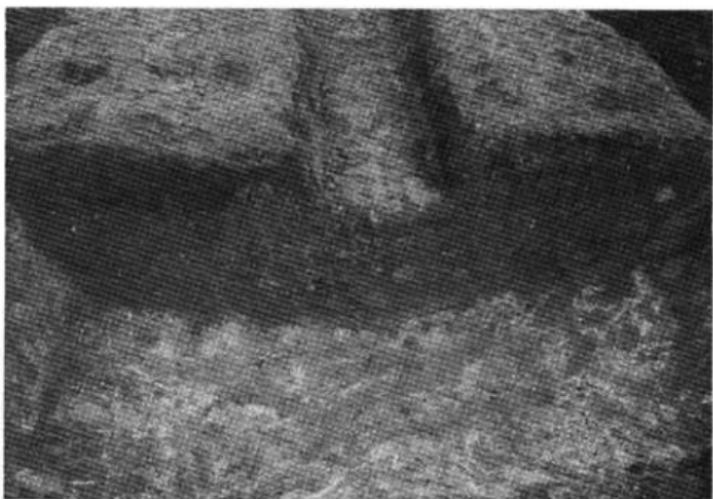


第 2 調 査 区

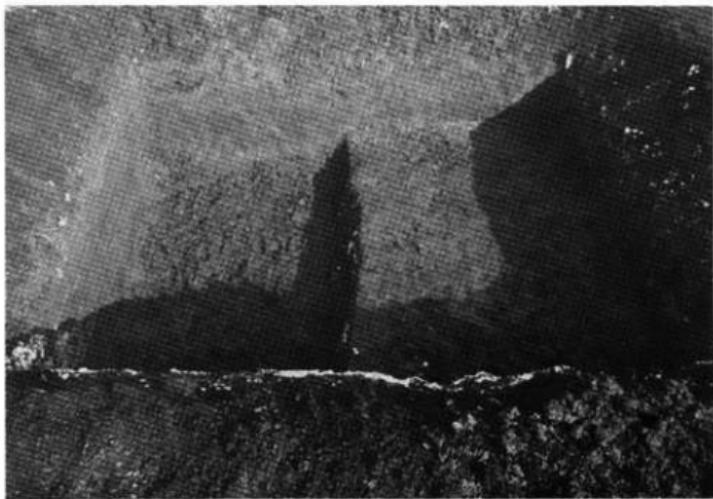


第 4 調 査 区

図版 4



方 形 遺 構 断 面



第 3 調 査 区

図版 5

古市Ⅲ型式軒丸瓦 (表)



(裏)



古市Ⅱ型式軒丸瓦



(裏)

(表)



古市Ⅰ型式軒丸瓦

(表)

(裏)



古市Ⅰ型式軒平瓦

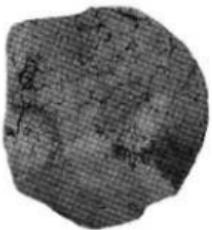
図版 6



11-2



11-1



11-5



11-6



古市遺跡

1986年

発行 安来市教育委員会

安来市安来町878-1

印刷 有限会社 松浦印刷

安来市安来町1,181